区画溝と周溝墓

―滋賀県五村遺跡の調査成果をもとに―

植野浩三

はじめに

本稿で紹介する五村遺跡は、滋賀県東浅井郡虎姫町に所在する弥生時代を中心とする集落跡である。五村遺跡は、虎姫町いきがいセンター建設事業に伴い、虎姫町教育委員会によって、一九九四年七月から一二月かけて大規模な発掘調査が実施され、その速報も出されている。[1] 筆者は同調査に関係し、発掘調査と整理作業の一部に加わり、参加者と共同で報告書を一九九七年一月三一日付けで刊行する事ができた。[2]

五村遺跡は、区画溝で画された中に弥生時代後期から庄内式の段階の方形周溝墓群が造営され、さらに別の区画の中には、当地方では例の少ない庄内式併行期古段階の張出(突出)部をもつ円形周溝墓が築造され、きわめて良好な墓域を検出することができた。さらに円形周溝墓からは、類例の少ない大型の供献土器や多量の木製品、隣接する区画溝からは円形周溝墓の造営・祭祀に関係すると考えられる石製品(石杵)が出土している。従って本稿は、同報告書の抄訳を兼ねて、特に遺跡の特色である「区画溝」について整理して考察し、広く一般に紹介して、資料の活用と御批判を願うものである。基本的には報告書を基本として、一部修正・加筆して報告する。さらなる詳細については、是非とも報告書を参照していただきたい。

また、本稿は筆者のみならず、発掘調査・整理参加者の努力と協力の結集であることを明記しておきたい。

一、五村遺跡の位置と既往の調査概要

五村遺跡は、滋賀県東浅井郡虎姫町大字五村・宮部に所在する。虎姫町は琵琶湖の北東に位置し、一般的に湖北と呼ばれる地域であり、南は長浜市に接している。遺跡周辺は、町の北方に存在する小谷山の南方に造り出された独立丘陵から緩やかな平地となり、遺跡の南側約五〇〇mには姉川が東西に走り、琵琶湖に注いでいる。遺構面の標高

は約九三mである。遺跡の周辺は、ほぼ平地を呈しており、全体的に西方の琵琶湖に向かって緩やかに傾斜している。

五村遺跡は、一九六三年に虎姫小学校体育館の建設時に最初に調査されて遺跡として認知された。その後、今回の調査を含めて計五回の調査が行われている(第一図・表一)。

一九六三年の虎姫小学校体育館建設に伴う調査では、弥生時代後期の住居址が四棟検出され、弥生時代の集落遺跡であることが確認された[3]。一九七九年には、滋賀県文化財保護協会によって圃場整備対象地域の水路部分の調査が行われ、北の地区において方形周溝墓を検出した。さらに南の地区より巴形銅器が出土し、この地区より住居跡が確認された[4]。巴形銅器が出土した地区は、今回の調査区の南側に隣接するが、遺構等の関係は不詳である。

一九八四年度には、給食センター建設に伴う調査が滋賀県教育委員会により行われた。出土した遺物は、弥生時代後期を中心とするものであったようである[5]。さらに一九九〇年度には、滋賀県文化財保護協会によって虎姫小学校のプール建設に伴う発掘調査が行われた[6]。この地点は、一九七九年の調査地と、一九八四年の調査地の中間地点に位置し、遺跡の中心部と考えられる場所である。弥生時代後期の掘立柱建物と、庄内式〜布留式期の溝・土坑等が確認された。その他、北村圭弘・中村健二氏等によって弥生時代後期から庄内式期の土器が、虎姫中学校と虎姫高等学校の南側において表採されている[7]。

こうした既往の調査成果と今回の調査区を合わせると、五村遺跡は虎姫小・中学校を中心とした地域が居住域として比定でき、その北東側にあたる今回の調査区を含めた地域が墓域として推定出来るのである。こうした遺物・遺構の確認された地点を結ぶと、五村遺跡の範囲は虎姫中学校の北方約二〇〇mを北限にして、東西約四〇〇m、南北約三〇〇mの範囲が想定されるが(第一図)、その範囲は拡大される可能性が大である。

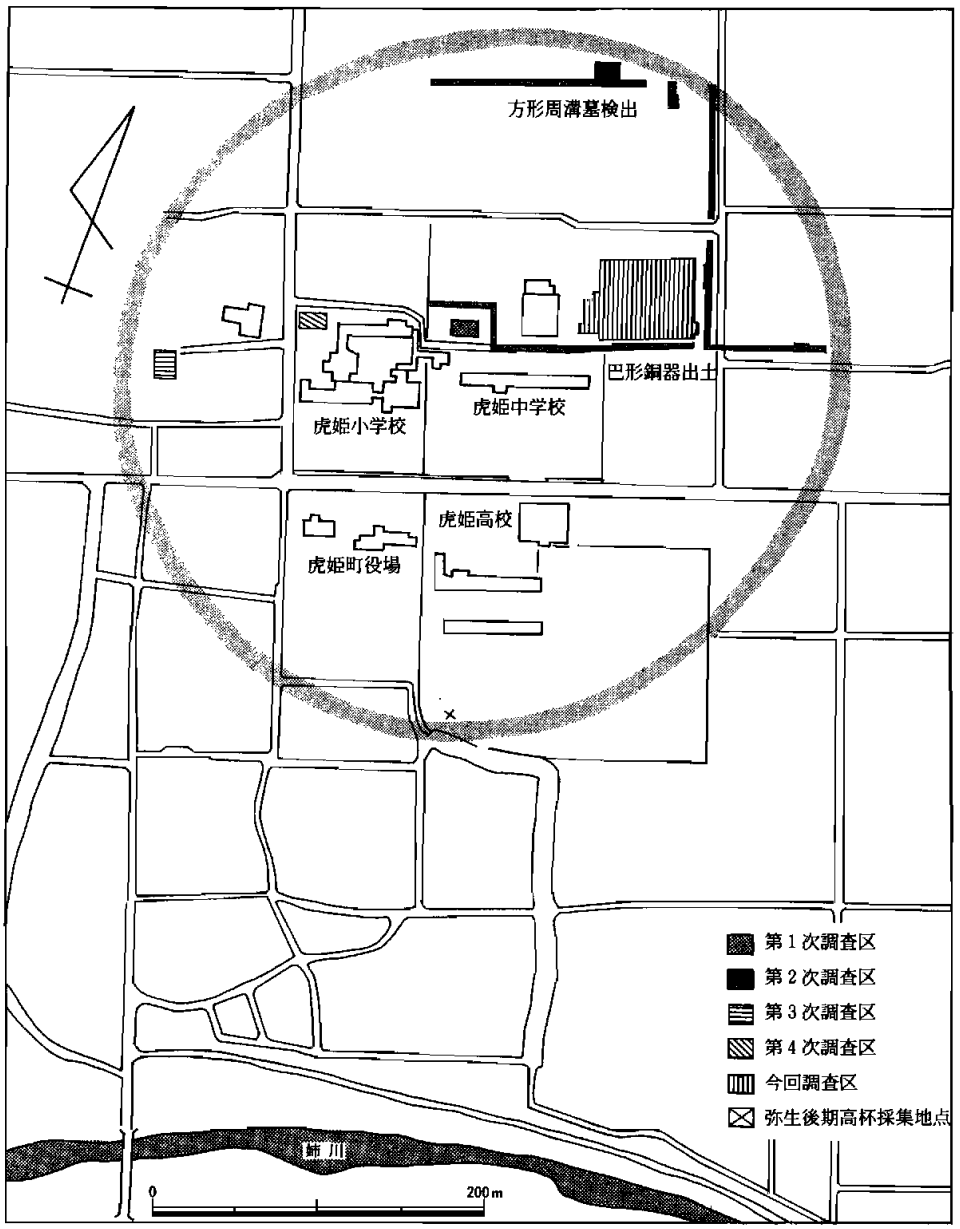
二、主要遺構の概要

今回の発掘調査では、円形周溝墓一基、方形周溝墓九基、溝状遺構二九基、土坑二四基、土壙墓三基を検出した。その配置は第二図の通りである。調査区には南北に溝6が貫流し、溝7が南半部の途中まで並行して走り、調査区のほぼ中央部で東側に折れ曲がり、北東部でもやや南に変換する。溝13は、溝6と平行して溝7付近まで延び、溝7の手前約二mの地点で終結する。

溝7と溝13に囲まれた中には、方形周溝墓群が営まれる。溝7に囲まれた範囲に1〜7号があり、溝7と13に囲まれた中に8・9号が存在している。円形周溝墓は、溝6の西側と溝15に挟まれた中に存在し、方形周溝墓と隔絶されて造られている。土坑は不整形なものが多く、各所に点在しており、土壙墓は調査区の北西部に集中して存在する。

表1　五村遺跡の既往の調査

次数	年度	調査の要因	調査主体	調査成果
1次	1963	虎姫小学校体育館建設	滋賀県教育委員会	弥生後期の竪穴住居跡4棟
2次	1979	ほ場整備事業	滋賀県文化財保護協会	弥生中期・後期方形周溝墓、住居跡、巴形銅器
3次	1984	給食センター建設	滋賀県教育委員会	弥生後期包含層
4次	1990	虎姫小学校プール建設	滋賀県文化財保護協会	弥生後期～布留式期溝、掘立柱建物



第1図　五村遺跡の既往の調査と遺跡推定範囲

(1)円形周溝墓

隅丸方形に近い不整円の円丘部に、短く突出する張出部を付けている(第二図)。平面形は「団扇形」を呈するが、周溝はほぼ円形に巡るため、円形周溝墓とした。円丘部は、西側の張出部付近において特に直線的になる。張出部は極端に短く、若干外側に拡がるが、基本的には長方形を呈する。周溝墓の上面はほぼ平坦であり、明確な主体部は検出できない。同部には土坑が存在するが、直接の主体部とはいえない。周囲に周溝が巡っている。ほぼ円形に近く全周するが、張出部にさしかかる付近から、周溝の幅が若干広くなり、一旦張出部で収束する。そして、両者の溝の内側に、僅か幅〇・二m、深さ〇・二mの溝を掘って連結させている。この溝は他の周溝とは異なり、張出部先端部を区画する小規模なものである。

円形周溝墓の規模は、張出部を含めた全長が二八mとなり、円丘部は東西約二二m、南北約二〇mを測る。周溝を含めた全長は、東西約三〇m、南北三一mである。張出部は東西約二m、南北幅約四mを測る。周溝の幅は、一・五～二・五mであり、場所によって残存度が異なる。周溝底からの高さは、東側で〇・八m、張出部の最深部から、一・五mを測る。

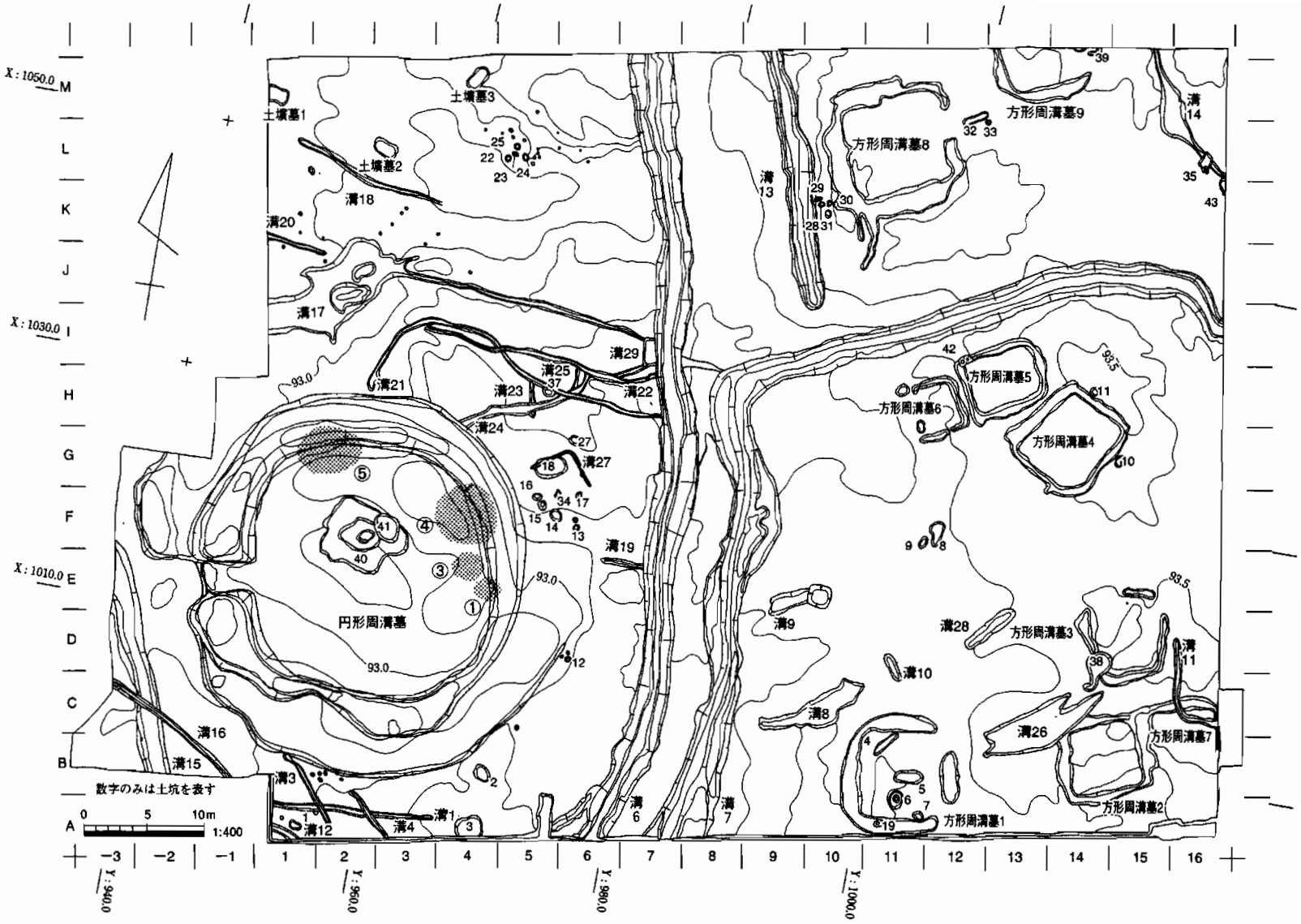
出土遺物は、円丘部裾部付近の五箇所で大型土器を検出した。このうち、円丘部北側と東側の四地点において、円丘面の裾部付近に接する形である程度まとまった形で出土している。いずれも掘方はなく、また合わせ口の状態は示していない点から、土器棺とは考えられない。ほとんどが、押しつぶされたような状態であり、ここでは供献された土器が転倒し、破片化したと判断した。以下、供献土器として呼称する。特に供献土器一・三は、その場で押しつぶされた状態であり、供献土器四はやや広範囲に広がるがまとまった状態で出土した。供献土器五の底部は、墳丘盛土にあたかも置かれた状態で出土し、口縁部は底部の東側に逆転して出土し、胴部片は口縁部と底部の周りに散乱した状態で出土した。ただし、供献土器二とした大型土器の口縁部は、南側周溝部から浮いた状態で出土した。供献土器二・四を除く出土状況のあり方と、これらの土器が円丘面に接して存在すること、それも円丘部の北側と東側の限られた地点の裾部に沿って存在することから、限りなく原位置を保っていると考えたい。

その他、周溝内からは多量の土器・木製品が出土した。特に、張出部両側では各種土器の他に、鍬形や鳥形を中心とする木製品が多量に出土した点は特徴的である。

(2)方形周溝墓群

方形周溝墓は九基検出している。いずれも残存状況はよくなく、調査区の東側半分が地形的に高くなっていることと関係して、後世の削平が激しいと考えられ、周溝の深さは約二〇～三〇cmと浅い。

各周溝墓は、方形周溝墓6の四×五mを最小として、方形周溝墓8の一一×一一mを最大の規模とする。各周溝墓は、基本的には周溝を



第2図　五村遺跡　1994年度調査区全体図（円形周溝墓の網部は供献土器）

全周させていたと考えられるが、方形周溝墓1・3・6・7は周溝の一部を欠く。8は東側に開口部を設けているのが特徴であり、それも中軸線上に載る。中心主体部は削平のため確認できない。また、周溝内には土坑をもつものもあるが、埋葬施設として断定は出来ない。

方形周溝墓は、溝7に囲まれた中に1～3・7、4～6の群が存在し、溝7と溝13の中に8・9の群が存在している。群内の築造順序は、推定すれば可能であるが、出土遺物からは明確に出来ない。溝7と溝13の方向を意識して、三基前後のまとまりをもって築造されているのが特徴である。

出土遺物には、周溝内より少量の土器がある他、部分的に木製品の一部や石器が微量出土している程度である。

(3)溝・その他の遺構

溝状遺構は大小合わせて二九本検出している。明確に掘り込んだものは溝6・7・13および15であり、その他は小規模である。

溝6は、調査区の中央を南北を走る。全長南北約六五mを検出し、幅約五～五・五m、深さ約〇・六～〇・八m、幅約三～三・三mを測る。溝6は、中位まで埋没してから再掘削を行った状況が観察できる。多量の出土遺物があり、弥生時代後期後半から庄内式併行期前半段階と考えられる土器と木製品が出土している。木製品には、農耕具・容器の他、竪櫛も出土しており、その他、水銀朱・ベンガラの付着した石杵や瓢箪・獣骨が出土した。遺物の廃棄が行われたと考えられる。

溝7は、調査区の南東部を区画するように、東から調査区の中央部へ延び、そして溝6と並行して南へ走っている。また、北東部でも南に折れ曲がる様相を呈しており、場合によれば方形に巡っていた可能性もある。溝は標高の高い調査区の東側から西方へ、さらに南側へと流れていたと考えられる。全長南北約四〇mを検出し、東西約四五m、深さ約〇・六m、幅一～四mを測る。

出土遺物は、弥生時代後期後半の大量の土器や磨製石剣の切先があり、溝6とほぼ同時期に機能し始め、溝6より早い弥生時代後期末の段階に埋没した可能性が高い。溝7がほとんど埋没した後、溝7の上層は自然流路(溝5)として存在していたと考えられ、庄内式併行期後半～布留式期の遺物が若干出土した。

溝13は、全長南北約二五m、深さ約〇・六m、幅約二mを測る。方形周溝墓8の西側に位置し、溝7の手前で途切れ、意識的にこの場所を開口させていると考えられる。出土遺物には弥生時代中期後半の土器が少量と、後期中葉から庄内式併行期前半の土器が出土している。

溝15は、円形周溝墓の西側をほぼ南北に走る溝であり、規模は南北方向で約一八m、幅約二mを測る。溝の断面断面形は逆台形であり、深さは〇・二mと比較的浅い。上層は削平された可能性がある。出土遺物は、弥生時代後期末から庄内併行期最古段階の土器と、大足か織機の中筒と思われる木製品がある。

土坑は、合計二四基確認している。いずれの一m内外のものであり、

円形に近い九基以外は不整形なものが多い。円形周溝墓構築以前の遺構と考えられる。溝6・7や、方形周溝墓1〜7と同時期の可能性があるが、性格は不明である。少量の土器が出土している。

土壙墓は三基ある。長方形の平面を呈し、一×二m前後の規模をもつ。三基とも調査区の北西部に間隔をもって存在する。土坑とは平面形や断面形が異なるため土壙墓とした。少量の土器を含み、土壙墓3からは打ち欠いた壺形土器が出土した。弥生時代後期後半と考えられる。溝6・7の西側に位置し、方形周溝墓群とは隔絶されている。

三、主要遺物の概要

五村遺跡からは、多量の土器・木製品の他に、石製品・動植物遺体が出土した。以下、円形周溝墓と溝6の主要な遺物を概要を記す。これ以外の遺構でもかなりの遺物が出土している。

(1)円形周溝墓の出土遺物(第三・五図)

円形周溝墓からは、次に記す大型の供献土器一〜五の他に、各種土器・木製品が出土している。

1は供献土器一とした、二重口縁をもつ壺形土器である。円形周溝墓の円丘部の東端付近に頭部を北西に向け、押しつぶされた状態で出土した。口縁部は約二分の一程度欠損するが、ほぼ完形に近い。口縁部は、一度屈曲部まで成形した後、外湾する口縁部をつけて複合口縁とし、屈曲部と口縁部下に凸帯を貼り付ける。口縁部外面に櫛描波状文を三条巡らすが、最上段と最下段の波状文は波が浅く、中央部の波状文は波が深く表現されている。波状文を施した後に円形浮文を貼り付け、さらに竹管文を刺突している。頸部には貼り付け凸帯を一条巡らし、凸帯上に右上がりの刻み目を施す。胴部の最大径は、中心部よりやや上方となり、肩の張った形態になる。胴部下半部の中央部に焼成後に穿孔を行っている。胴部内外面ともにハケ目調整を行い、外面はミガキ調整、内面は底部付近でハケ目をナデ消している。頸部と胴部の一部に水銀朱が付着している。本来は、表面全体に塗布されていた可能性がある。

2は供献土器二とした二重口縁の壺形土器である。円形周溝墓南側周溝付近の覆土より出土した。口縁部のみの出土である。1と同じく、一端擬口縁を作りだして上方に口縁部をつけ足し、口縁部外面に粘土を貼り付けて有段口縁としている。口縁端部にヘラ状の工具で刻み目を施す。口縁部には波状文を描いている。同一個体と思われる胴部片も出土したが、接合・図化は不可能であった。1とほぼ同型式であるが、細部で微妙に異なっている。

3は供献土器三とした、所謂パレススタイルの壺形土器である。1より北西に約一・五m離れた円丘部で、同様に押しつぶされた状態で出土した。口縁端部外面と内面に羽状文を施す。頸部に断面三角形の貼り付け凸帯を一条巡らす。外面には、波状文と直線文を描く。直線

文の間には波状文を配している。最大径は、胴部中央よりやや下にあり、新しい様相を呈する。また、頸部の割れ口断面には、赤色顔料が付着した土器細片が素地として入っている。混和材として土器片を使用したものであろう。

4は供献土器四とした二重口縁の壺形土器である。3から北へ二・五m程離れた円丘部裾部付近で出土し、約二mの円の範囲に固まった状態で検出した。一端、擬口縁を成形した後に、上方に口縁部をつけ、屈曲部は下方に引き出して二重口縁を形成する。口縁部には、二条の沈線を描いた後、三個一組の円形浮文を貼り付け、円形浮文の上に竹管文を施す。頸部と胴部の境界に凸帯を付ける。胴部外面は、ヨコハケ目調整の後タテミガキ調整を行う。胴部内面の下半部は、接合の際に下方から上方へ指ナデを行う。

5は供献土器五とした二重口縁の壺形土器である。円丘部北側の裾部付近でまとまって出土し、口縁部はやや西よりで散乱した状態で出土した。口縁部は4と同じく、擬口縁を作った後、上方と下方にそれぞれ外反、垂下させて二重口縁を作りだしている。口縁端部に二条の擬凹線、垂下させた外面に五条の擬凹線を描いた後、三個一組の円形浮文を貼り付け、円形浮文の上に竹管文を押捺する。頸部には凸帯の剥落した跡が見られる。胴部外面は、ヨコハケ目調整を行ったのちタテミガキ調整を行う。胴部内面はタテハケ目調整後、タテ方向のユビナデを行う。底部は平底であり、底部から三・五cm上方に内面から穿孔を行っている。

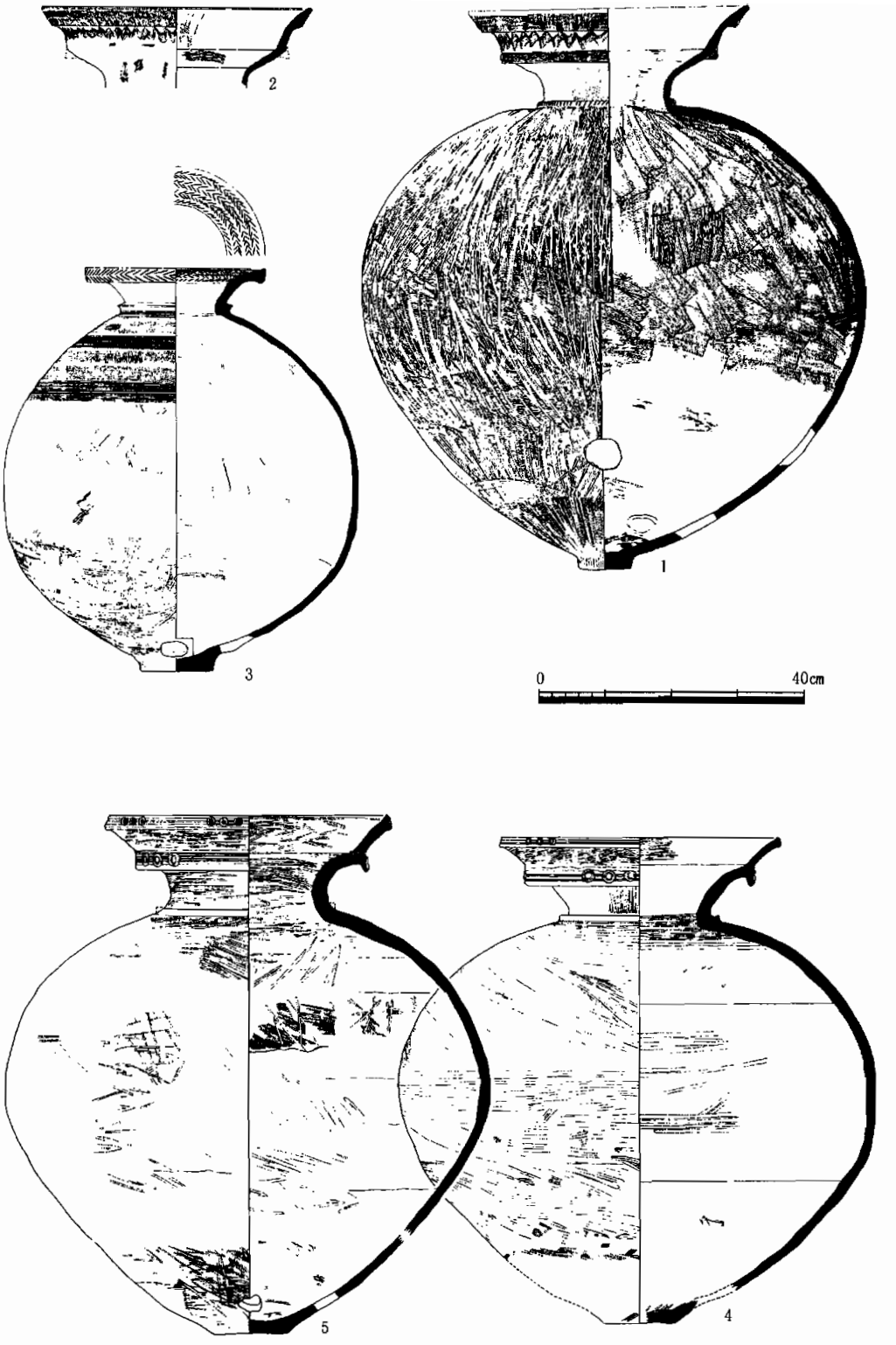
供献土器は一と二、また四と五は形態的・技法的にも非常に類似している。三については、今回掲載はしていないが、周辺部から同じ形状の口縁部が出土しているため、これらの大型の供献土器は、二個一組で製作された可能性がもたれる。

その他円形周溝墓では、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、器台形土器、手焙形土器、盒子形土器が多数出土している。6～9は甕形土器である。6・7は、口縁部の形態が受け口状になるものである。口縁部外面に列点文を施し、体部から口頸部の一部にかけて櫛描直線文を巡らす。8は口縁部を欠いているが、体部外面に叩き目を残す。10は甕の脚台部である。9は、扁平の甕形土器であり、外面に6・7と同様の文様を施す。

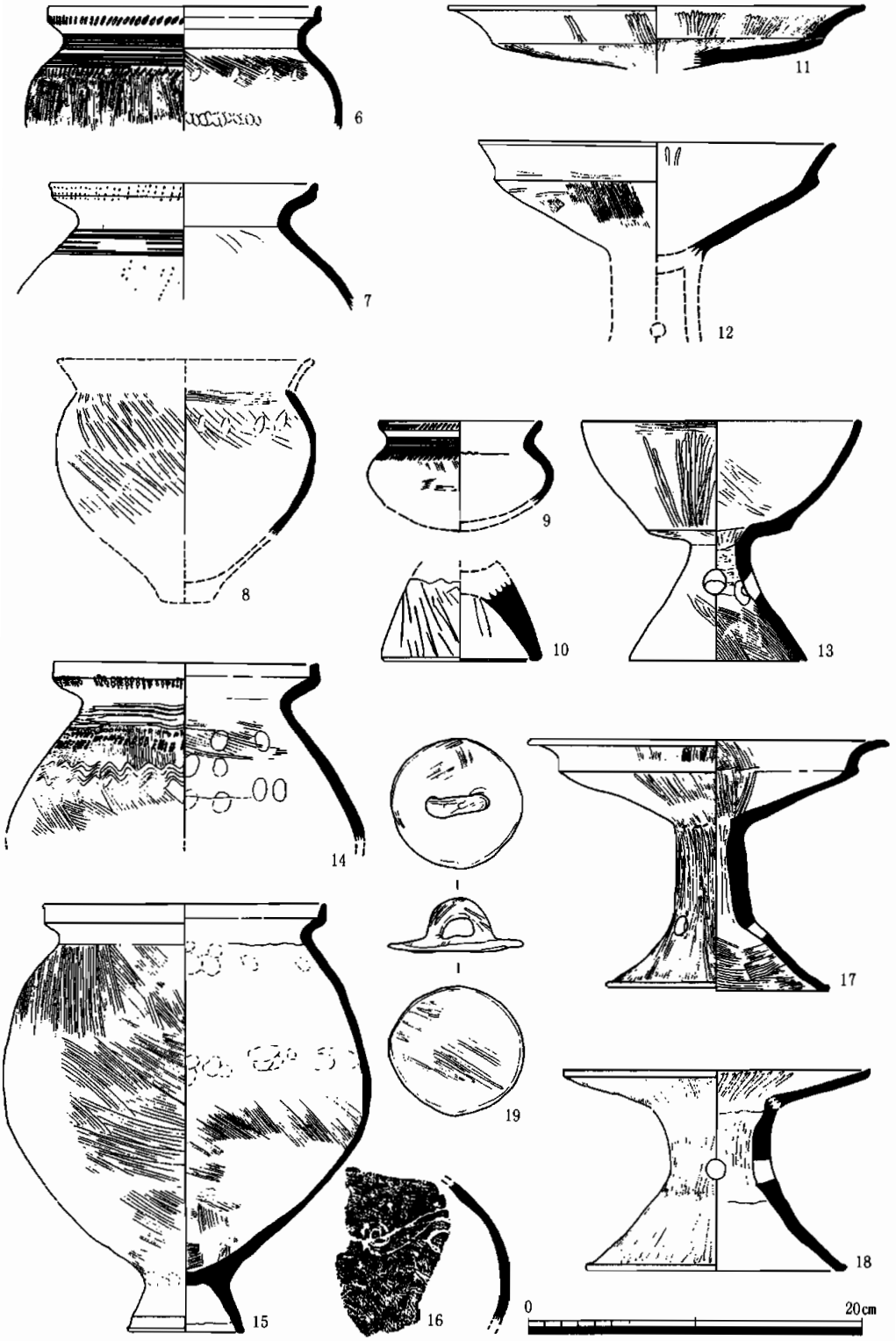
11～13は高杯形土器である。11・12は、上半部で屈曲して外側に開く。11は杯部が浅く、12は深めの杯部を有する。11は内外面にヘラミガキを残す。13は、深い杯部に「ハ」の字形の脚部を付け、円孔を入れる。欠山式に見られる高杯と考えられる。

21・22は鳥形木製品である。円形周溝墓から二点出土している。円形周溝墓張出部北側周溝より出土した。21は小型であり、下部(腹部)のみ突出する。22は、21に比べて大型であり、形態も上下に凹凸を作り出して複雑である。いずれも板材を使用し、樹種はヒノキである。

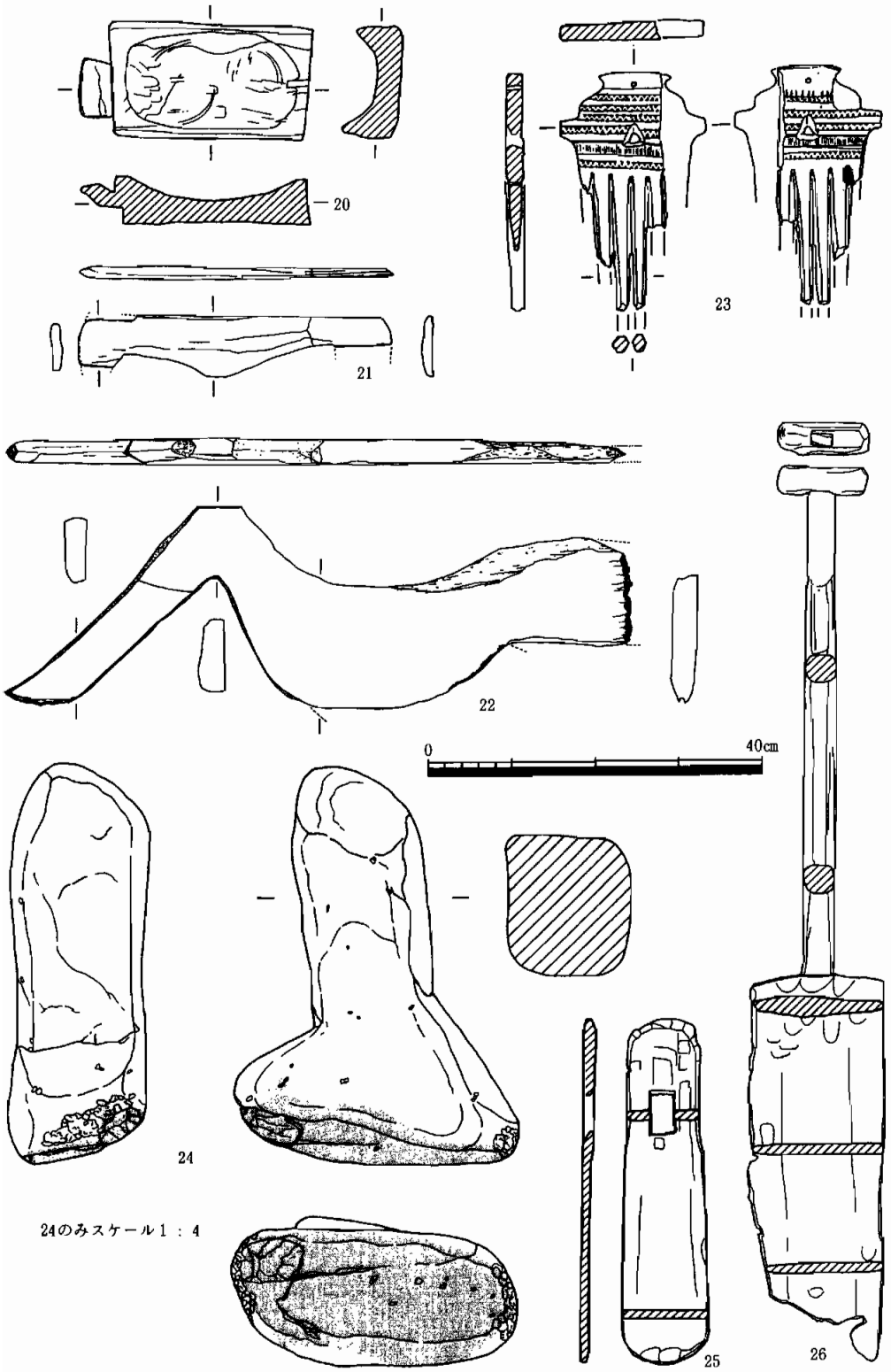
26は鋤である。鋤・鋤先には、一木鋤と組合式の鋤が出土している



第3図　五村遺跡の出土土器（円形周溝墓）



第４図　五村遺跡の出土土器（６～13円形周溝墓、14～19溝６）



第5図　五村遺跡の出土遺物（21・22・25・26円形周溝墓、他は溝6）

が、26は柄部のみ組合せ式になっている。樹種はコナラ亜属である。その他、一木鋤の中には鋤先が叉状になるものもある。25は直柄鍬であり、樹種はアカガシ亜属である。

これらの遺物は、供献土器一～五(第三図1～5)がおおむね庄内式併行期の最古段階に属する。しかし、3は柳ヶ坪型土器の祖形である廻間Ⅱ～Ⅲ式に並行するとも考えられ、多少新段階の可能性もある。これらの土器に時期差があるとすれば、供献土器の設置にも多少の時間的差が存在したことになる。

(2)溝六の出土遺物(第四・五図)

溝6では多量の遺物が出土した。出土遺物は大きく上層と下層に分かれるが、層位別に取り上げた上層と下層で接合するものがあり、層位的な関係と遺物の時間幅は必ずしも安定していない。

出土土器には、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・台付鉢形土器・器台形土器がある。14・15は甕形土器である。受け口状の口縁部をもち、14は口縁部に列点文、肩部に櫛描直線文・列点文・櫛描波状文を施す。15は脚台がつく。16は壺形土器の胴部片と思われる。胴部外面に篦描きの「S」状沈線文を描く。壺形土器には掲載はしていないが、その他パレスタイルの壺形土器がある。17は高杯形土器であり、18は器台形土器である。19は鏡形あるいは蓋形を呈する。

溝6は、弥生時代後期後半の土器と庄内式併行期の最古段階のものが存在する。掲載した遺物は後者のものが大半である。

24は河原石を使用した石杵である。棒状の部分に「凸」形に膨らむ基部を付ける。形態的には、「凸」字形と「L」字状の中間的な形態になる。端部は膨らみをもつ滑らか曲線となる。同部はかなり磨り減っており、赤色顔料が付着している。赤色顔料は、ベンガラと水銀朱の両方の成分が抽出されており、双方の破砕に使用した可能性が高い。

20は刳物の容器類と考えられる。長方形の中央部分を刳り込み、片方の小口部に突起を削り出している。樹種はスギである。23は、一枚板刻歯式の竪櫛である。残存値で全長七・二㎝、幅は棟部の突起部で三・一㎝、厚さは棟部・歯部ともに五㎜を測る。歯の部分の透し孔を中心にして、約三分の一が欠損している。両側の棟部の中心部に三角形の透しと、棟部上半の中央部と毛引きの部分に直径一㎜の孔を施す。表(左)面には、三角形透しの底辺に沈線を入れ、その下方にも沈線を施して、裏(右)面と同じく帯状に沈線間を浮かび上がらせている。三角形透しを中心にして、上部に複合鋸歯文を四帯、下部に一帯巡らす。裏(右)面は、棟部中央部の三角形の透し孔の底辺の部分を境として、棟部上半部が低くなる。この段の下に沈線を描き、段と沈線の間を浮かび上がらせている。そしてこの段の上に複合面鋸歯文を三帯、下に一帯施す。表面の毛引きの部分にベンガラが付着している。

木製品の大半は、円形周溝墓から出土しており、溝6・7・9・15からも少量出土している。その種類は、掲載した鋤・鍬・竪櫛・鳥形木製品・槽の他、桶・容器類・梯子・腰掛状の脚等がある。

四、遺物の特徴と性格

今回の調査では、円形周溝墓から大型の供献土器が出土した。本稿並びに報告書では一貫して供献土器として記述したが、これは前章でも記したように、出土状況から土器棺としての痕跡を認めないこと、破砕供献土器でもないことから、円丘部裾部付近に据えられた供献土器として認識した。供献土器は、確実に四個体が置かれていた様子が復元でき、点数では六個体の可能性がある。一般的な小型の土器の出土例は、周溝墓では通有であるが、こうした例は庄内式の段階では類例がないといってよい。特殊器台形土器や特殊壺形土器の供献や、その延長上にある前期古墳の供献土器のあり方にも共通しており、首長墓的な祭式の強いものであると考えたい。

ただし、使用された土器の形態は、当地方ものと東海地方と共通するものがある。特に第三図3は、大垣市東町田遺跡出土[8]のものに類似しており、東海色の強いものである。西日本に類例の多い円形周溝墓の形態をとりながらも、こうした東海系の土器の存在は、単純に理解にできない。葬送儀礼の系譜とは別に、周辺地域との交流のあり方を示す資料として考えたい。

円形周溝墓からは、多量の木製品が出土した。周溝墓から使用・未使用の木製品が出土することは多い。特に鳥形木製品については、県内では類例の少ないものである。他の農耕具や容器等の木製品を含めて、周溝墓で出土する意義を考える必要性がある。また、張出部付近からの出土が多い点は、この箇所が墓前の祭祀や葬送儀礼と密接に関係していた可能性がある。

また、竪櫛についても、稀有な例である。前章のように、文様が特徴的である。この竪櫛が溝6から出土した点が重要であろう。溝6には、次で述べる石杵の他、円形周溝墓と同時期の多量の土器が出土した。墓域に接する溝の遺物は、祭祀等の使用後に破棄された可能性が高いことが指摘されている。櫛そのものがどのような用途でここに破棄されたかは判断できないが、少なくとの周溝墓内に副葬された可能性は少ない。もちろん大阪府東奈良遺跡のように、埋葬施設の中から出土した例も少量あるが、多くはその周辺部河川等の出土が多いため、当例も祭祀の過程で破棄されたと考える[9]。

石杵も溝6から出土している。石杵は基部がかなり磨り減っており、赤色顔料が付着していた。赤色顔料は、ベンガラと水銀朱の両方の成分が抽出されており、双方の破砕に使用した可能性が高い。すなわち、この地において顔料を破砕して塗布し、その後に破棄されている。五村遺跡の埋葬施設については明確でないため、この顔料を何に塗布したかは明確ではないが、一つには分析結果からベンガラを抽出した円形周溝墓の供献土器があげられる。

石杵の類例や意義については、佐々木勝氏が石杵が墓制と深く関係

する遺物として位置づけられ、さらに広く祭式に含まれる行為の産物である点を指摘している。[11] それが、円形周溝墓のような盟主的な墓において使用された可能性が高いことが重要であろう。後代には形骸化していくにしても、前期から中期の古墳にも伴う例があることを考慮すれば、弥生時代から継続してこうした祭式が存続していたと判断できよう。赤色顔料を作り出す石杵の必要性は、当時の葬送儀礼を復元する上できわめて重要であろう。

特に、張出しをもつ円形周溝墓は、単にその形態のみが伝播したのではなく、こうした祭式が同時に持ち込まれた点が重要である。それは、首長の葬送に際して重要な意味をもち、あるいは不可欠であり、そうした行為と墓の形態が、限られた盟主の墓に採用された点が重要と考えられるのである。

五、遺構の時期と変遷

今回の調査では、溝6・7・13・15で大きく画された中に、方形周溝墓九基と円形周溝墓一基を検出した。さらに付随する多くの溝や土坑・土壙墓等を検出している。ここでは、出土した遺物や遺構配置のあり方を検討して、代表的な遺構の時期を明らかにし、五村遺跡内での遺構の変遷過程を示しておきたい(第六図)。不明な部分も多いが、一～四次調査の成果も付け加えておく。

(1)弥生時代中期末～後期前半

五村遺跡では、まず弥生時代中期末に、今調査区の北側の地区で方形周溝墓が造られ始める(第一図)。今回の調査区を含めた地域が、墓域として形成され始める。また、虎姫小学校付近では、弥生時代後期の包含層が確認されており、同小学校体育館付近でも竪穴式住居址の存在が認められる。これらは後期前半に属する可能性もあり、この地域が居住域の可能性としてある。

(2)弥生時代後期中葉

この時期には、今回の調査で確認した溝7・13と、溝1～3・17・21・22の遺構がある。溝13は出土遺物から、この時期より機能し始めたと考えられるが、溝13が北へ延びて第一次調査の方形周溝墓に至る可能性もあることから、前段階から機能していた可能性もある。今回の調査区内ではこの時期の方形周溝墓は確認できず、墓域として形成される以前の段階と言える。遺構の配置からすれば、溝7もほぼこの時期に所属すると考えられる。

(3)弥生時代後期後葉～後期末

今回の調査区内では、この時期から方形周溝墓が造られ始める。主な当該期の遺構は、溝7・13に加えて、溝6と方形周溝墓1～7、土壙墓1～3である。七基の方形周溝墓は、溝7によって区画された空間に造られる。溝6は溝7に遅れて出現するが、ほぼ並行して南北に縦断している。後期末葉に近い時期が考えられる。土壙墓は、溝6を

挟んだ西側に集中して造られる。住居址等の遺構は確認されていないが、後期前半から引き続きて虎姫小学校付近から西方にかけてが居住域として想定できる。

(4)庄内式併行期前半

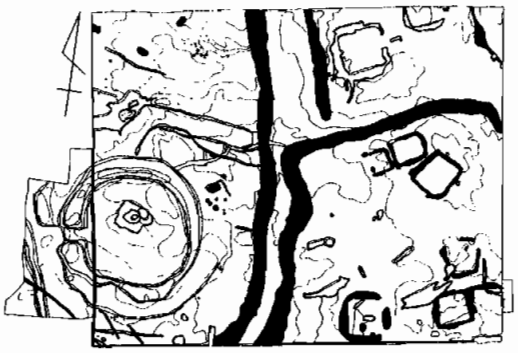
この時期には、前段階から存在した溝6が引き続き存続し、一部は掘り返しが行われて、遺物の廃棄溝として機能する。この溝の西側に、張出部をもつ円形周溝墓が造られる。そして張出部西側の溝15も円形周溝墓に併行する時期と考えられる。溝13は機能的には衰退するが、引き続き上層部に遺物が廃棄されており、その東側に方形周溝墓8・9が造られる。今回の調査区では、方形周溝墓の最終段階のものである。虎姫小学校プール付近では、この時期に該当する東西方向の大溝が検出され、掘立柱建物も存在するようである。

(5)庄内式併行期後半以降

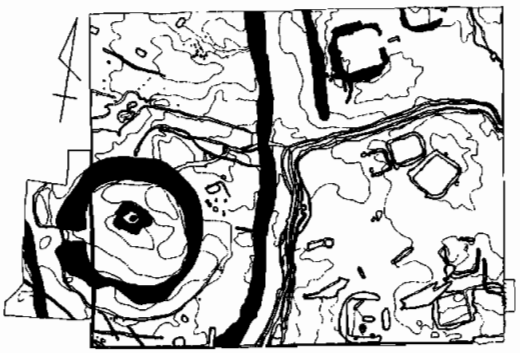
庄内式併行期後半以降では、今回の調査区内で検出した溝7の最上層を流れる溝5と、溝15に切り合う溝16・土坑18と、溝27が該当する。前段階の大溝は、この時期にも機能している。居住域は引き続いて小学校付近に推定でき、その東側に墓域がある。

その他、五村遺跡では、弥生時代前期の土器片や布留式の影響を受けた土器片と、5世紀末葉から6世紀代の須恵器片が出土している。周辺部に当該期の集落が展開していた可能性がある。

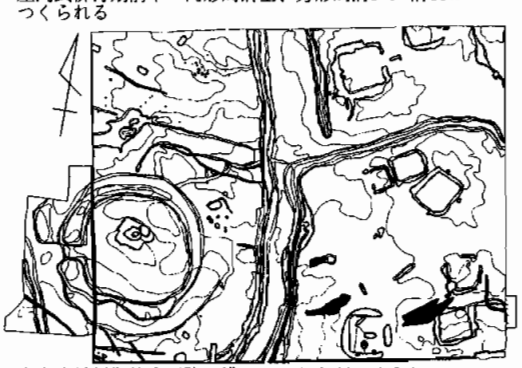
弥生時代後期中葉　溝4・13・17・21などがつくられる



弥生時代後期後葉～終末　方形周溝墓1～7、溝6・7・土壙1・2・3がつくられる



庄内式併行期前半　円形周溝墓、方形周溝8・9・溝15がつくられる



庄内式併行期後半以降　溝8・9・16などがつくられる

第6図　五村遺跡の遺構変遷図

六、遺構配置の特色

五村遺跡の遺構の時間的な変遷は、前章のように整理することが出来た。ここでは、この成果を基にして、今回調査した五村遺跡の遺構配置の特色について整理してみたい。

(1)区画溝の存在

五村遺跡において特色があるのは、遺構の配置であろう。今回の調査区では、溝6が調査区を二等分するように南北に走り、それに並行して溝7が延び、途中で「L」字形に東に折れて続く。さらに北側には、溝13が掘られており、これも溝6とほぼ並行して存在するが、溝7とは連接せず、手前で止まっている。溝の掘削順序は、出土遺物からの判断では、溝13から溝7へ、少し遅れて溝6であるが、少なくとも弥生時代後期後葉から終末期にかけては共存していた。さらに庄内式併行期最古段階においてもそれを残していた。

各溝はお互いに並行や直角を守って造られており、規則性が認められる。これは、第一に墓域を区画する役割が大きいと判断している。溝7の中には、方形周溝墓1〜7があり、溝13と溝7の範囲には方形周溝墓8・9が造られるのは偶然ではない。溝の配置からすれば、溝7の掘削の後に、溝13が溝7を意識して造られた状況が推定できるが、出土遺物からは断定できない。従って、溝7は溝13と同時か、あるいはさほど時間差をもたずに掘削された結果、溝同士が切り合うことなく存在し、かつ方向を一にして存在し、さらに溝との間に空間を残したと理解するのも可能であろう。

溝6については、確実に溝7と溝13の後に掘削されたことが明らかである。溝7と溝13の方向を意識して、両溝との間に距離を空けて掘削され、その西側に円形周溝墓が築かれている。溝6は、溝7が東側に折れ曲がる箇所に関係なく、三mの間隔をもたせて併走し、調査区の北端まで築かれているが重要であろう。つまり、この間隔は意識的に開け、機能していたと判断できる。一には道等の施設であり、二には調査区の東部と西部の再区画、言い換えれば方形周溝墓群と円形周溝墓をより明確に区画、区分したと推測できる。これは、円形周溝墓の西側に溝15が掘削されていることからも窺え、円形周溝墓が位置する区域を新たに区画している。

従ってこれらの溝は計画的に掘削され、墓域を区画する区画溝として機能していたと考えられる。溝によって大きく居住域や生産活動の空間から区画された。そして、道と溝は墓域と居住空間を結んで、機能的に連接していたと考えられる。

(2)区画溝の検討

墓域や周溝墓を画する区画溝は、他地域にも存在している。関東地方の類例については、福田聖氏が論考している。[11] これによると、墓域に伴う溝は、大きく墓域全体を区切る区画溝、墓域内を細区画する溝、

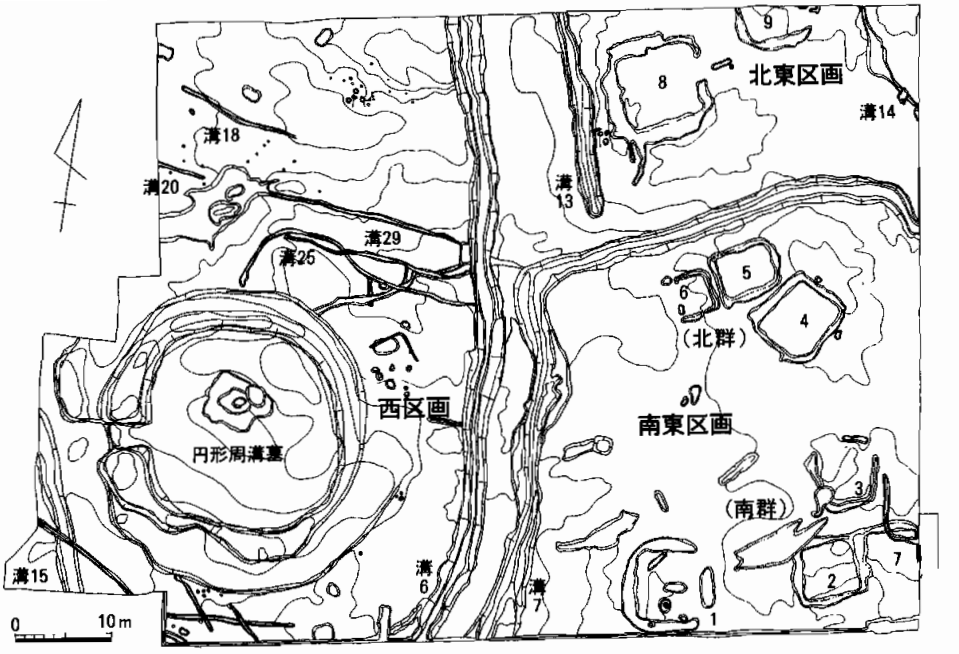


図7　五村遺跡の全体図（番号のみは方形周溝墓の№を表す）

周溝墓同士をつなぐ連結溝に分かれるという。連結溝は、数基ごとでまとまる周溝墓群を連結させることにより世帯等の関係を示したものと推測している。本遺跡では、こうした連結溝は確認されていないため、区画溝の検討のみを行いたい。福田聖氏によると、区画溝は大きく次の三類型に分かれるという。

㈠、墓域の造営段階から掘削されたもの。

㈡、周溝墓造営途中から掘削され、その後の方向を規制するもの。

㈢、方形周溝墓群内の区画を行ったもの。

こうした分類を当てはめると、五村遺跡ではこの中の㈠と㈢が該当する。その中でも㈠の造墓前からの溝の区画が大きな特色といえる。こうした溝で区画された地区は、大きく3地区になる。溝7と溝13で区画された「北東区画」、溝7で囲まれた「南東区画」、さらに溝6と溝15で区画された「西区画」である(第七図)。北東区画では、溝13から弥生時代後期中葉から後葉頃の土器が出土しているのに対して、方形周溝墓8・9は庄内式併行期古段階に比定できるため、区画の後に方形周溝墓が造られていることが判る。しかし、この北側地域では弥生時代中期後半代の方形周溝墓が検出されており、この段階から溝の掘削が行われた可能性もあり、㈠の分類とも矛盾しない。そして、溝13は長期間に亘り機能して、方形周溝墓8・9が築かれた段階まで区画溝の役割を果たしていた。

南東区画では、溝7とこの中の方形周溝墓群の遺物はほぼ同時期で

ある。南・東側の範囲や状況が不明のため断定できないが、周溝墓が溝の方向にほぼ沿って造られていることから、溝の掘削後に周溝墓の造営が始まったと考えられ、右記の㈠に属する。

西区は、溝6の掘削が行われた後に円形周溝墓が築かれていることが確実である。その意味で東西を大きく分けるこの溝の意義は重要である。また、明確な時期差は認めがたいが、溝15は円形周溝墓とほぼ同時であり、円形周溝墓の後に掘削されたものではない。このことから、前記の㈠に該当する。

以上のことから、五村遺跡の区画溝は周溝墓の築造前、あるいはほぼ並行して築かれたとする事ができる。それも、長期間存続した溝も存在することから、計画的に長期的展望をもって設定されたことが窺えるのである。

西日本のこうした墓域を画する区画溝についての類例は、現段階では収集していないが、周溝墓の周辺に河川状遺構を伴うものは多く存在する。長浜市大戌亥・鴨田遺跡や越前塚遺跡においても、河川状遺構が周溝墓と切り合うことなく存在しているため、こうした遺構が区画の性格の一部を担っていた可能性は充分あるが、五村遺跡のように明確な目的によって掘削されたものではない点が異なる。集落における区画・計画性についての是非は今後の検討課題である。

(3)大区画と小区画溝

一方、この今回の調査区では、これらの区画溝の他に、小規模な溝が存在することが判る。遺構の遺存度が悪いために具体的な位置付けは難しいが、この中の溝のいくつかについて見てみよう。

北東区画中には、方形周溝墓8・9が東西に並び、その東側に溝14が存在する。溝14は、溝13とほぼ並行するが、南側で東側に触れる。溝内の出土土器は弥生時代後半から末葉であり、溝13の出土土器の一部よりはやや下るが、同時期に併存していたことは確かである。溝14が区画された墓域内にあること、溝13とほぼ並行すること、方形周溝墓9と切り合うことなく周溝墓の東側に隣接して存在することが指摘できる。こうした点は、この溝が周溝墓群や造墓行為と大きく関係していたことが推測できるのである。

溝14は南半分が東に触れて延びている。これは、溝7の北東部分がこの部分で折れ曲がり、南に方向を変換するのと付随しているようである。そうすると、溝14は、溝7とほぼ同時期の可能性もあり、北東区画の中での規則性をもって、溝7と13を意識して掘削されたことが読みとれる。墓域の中でその存在意義あったのである。したがって、溝14は北東区画の中を細区画した小区画の溝の可能性がもたれるのである。その西側には、方形周溝墓8・9が築かれる。こうした小区画の溝は、福田氏の「墓域内を細区画する区画溝」として位置づけられ、大区画と共に、細区画する溝が存在したのである。

今回の調査では遺存状態が悪く、その他の溝等の遺構については不明な点が多いが、西区北半の溝18・20・25・29について見てみよう。

これらの溝は幅が狭く、深さもさほど無い。出土遺物は溝7・13と同じく、弥生時代後期中葉が考えられる。溝の方向は東西に延び、ほぼ並行している。溝の東端は溝7の北西部で結合すると考えられ、南東区画の中までは進入しない。また、溝18と溝20を延長すると、溝13と溝7の開口部に位置しているため、これらの溝が大区画の墓域と有機的に関係していた可能性がある。

特に、溝18の北側には土壙墓が三基存在している。今調査区で土壙墓の存在を確認できたのはこの地域のみであるため、溝18は土壙墓域を区画する役割が推測できる。区画として存在したならば、その外区や周辺部の状況も考慮しなくてはならない。溝18・20・25・29は、平行して溝7の方向に延び、場合によれば道等の性格が指摘できるのである。しかし、それは溝6・7に挟まれたような強固なものではない点が異なる。方形周溝墓群の外区ではあるが、溝14のような小区画溝の役割をしていた可能性も否定できない。

この他に、調査区では小規模の溝や、後代の溝も存在するが、明確な区画という点において不明瞭である。方形周溝墓8の南西隅が溝状に南に延長するが、こうした痕跡を福田氏が説くような群単位を区切る連結溝とするには、説得性に乏しい。

(4)溝の区画と墓の配置

溝で区画された三地区には周溝墓が築かれていた。南東区画には、方形周溝墓1～7が造られており、北東区画には方形周溝墓8・9が存在する。さらに、西区画には円形周溝墓が造られている。ここでは溝の区画と周溝墓の位置関係についてみてみよう。

南東地区の方形周溝墓1～7は、周溝墓の築造順序を求めるには、出土遺物の量や遺構の遺存度からして不可能に近い。全体の配置としては、大きく北群と南群に分かれる(第七図)。南群の1・2・7は、ほぼ東西に並んで存在するが、1・2の間は少し空く。2と7は近接して築かれ、その北側に3が隣接して存在するため、群構成としては1と2・3・7の二群に細分できる。1については南側に連接して周溝墓が存在することが予想される。いずれも溝7の方向と比較的並行して築かれているのが特徴であり、規則性を認める。

北群の4～6は、やや変則的である。5・6は溝7に並行して規則的に築造されるのに対して、4のみ方向を変えている。方向は違うが、4は他の周溝と切り合うことがないため、近接時期のものであることは間違いない。

北群と南群とした中間には、明確な方形周溝墓は存在しない。やや後出の時期の不整形の土坑や溝状遺構があるが、周溝墓の可能性は無いと考えられる。仮にこの空間に墓が存在しないならば、造墓の予定を残して、未使用の空間の可能性がある。さらに、南・北群のあり方が当時の状態を示しているとすれば、造墓には各世帯ごとに場所が決まっており、その指定された空間に連続して営まれ、三基前後を一つの基準にして群を構成していたことがわかる。

溝13と溝7に囲まれた北東区画には、方形周溝墓8・9がある。この地域は北東区画の南辺に当たるため、北側の状況はわからないが、南東区画と同様に、溝13と溝7が並行・直交して規則的に築かれており、さらに前述のように小区画溝とした溝14に挟まれた中に、二基の周溝墓が築かれる。特に方形周溝墓8は、溝に隣接して並列して造られている。周溝墓群の時期は、南東区画よりは新しく、庄内式最古段階に並行する。この場所が北東区画の南辺にあたることを考えれば、この地区の造墓は北方向から始まり、次第に南下して北東区画の中でも最終段階を迎えた段階に8・9が造られたことは間違いない。

重要な点は、溝13の南辺部にある開口部である。この箇所は溝を繋げることなく約二mほど開けている。また、溝14の南端部もそうした可能性もある。特に溝13と溝7の開口部は、南北の道、あるいは西側からの道(溝18・20・25・29)と関係して、墓域への出入り口にあたると考えられる。そうすると方形周溝墓8・9へは、この出入り口を通じて進入したのであろう。区画溝と周溝墓の有機的な位置関係が指摘できるのである。

西区画にある円形周溝墓は、方形周溝墓群から区別されている点が重要であろう。方形周溝墓8は、円形周溝墓にきわめて近い時期であるが、あくまでも溝7と13、溝14によって大きく区画された中に存在し、方形周溝墓9と共存していた。しかし円形周溝墓は、溝7・13の西側に溝6を加え、これまでの墓域からさらに二重に区画された中に造られた様相を呈する。既存の溝7・13でも充分な区画と判断できるが、加えて並行する溝6を掘削し、溝6と溝7の間は約三mほどの道状の空間を設けている。この道が一つのポイントであろう。すなわちこの道は、東側墓域への進入や南北通行の目的が読みとれ、道が意識的に造られた様子がわかる。さらにこの溝と道は、円形周溝墓内の通行や進入を防ぐ役目を兼ねていた可能性が高いと考えられる。特に、円形周溝墓の北側に存在した前段階の溝は、方形周溝墓群内への進入経路が西からも存在した可能性を示しており、溝6はそれを寸断しているのである。

こうした状況から、円形周溝墓は、特に再区画された中に規模を大きくして、張出しを付設して築かれている。溝6は、円形周溝墓の直前の段階の掘削であるが、円形周溝墓に沿うように延びており、溝と周溝墓との相関関係が認められる。さらに円形周溝墓の西側には、南北に延びる溝15が掘削され、西側が区画されてる。ただし、円形周溝墓の北側については広い空間が残り、やや問題を残すが、この箇所には当該期の遺構が築かれていないことが重要である。この地域には、連続して周溝墓を築造する計画があった可能性も考えておきたい。

西区画に築かれた円形周溝墓は、長軸を東西にもち、張り出し部が西側に付く。中心軸は溝6と直交しているのである。これも偶然とは言えず、溝の区画に伴った造営計画であると考えられる。西側からの経路の可能性は、溝18・20・25・29のあり方から予想されるが、あえ

て前段階の方形周溝墓群の前面に配置したことが、円形周溝墓の造営にとって重要な位置を占めていたと推測できる。

七、張出付き円形周溝墓の成立

五村遺跡での墓域の変遷と位置関係は前述の通りであるが、円形周溝墓成立段階を見ると、きわめて重要な事実がある。方形周溝墓8の存在である。方形周溝墓8は、周溝を全周させるのではなく、東側の中央部が掘削されていないのが特徴である。これは、五村遺跡の周溝墓には見られない形態である。遺構の遺存度の悪さからくるものではないことは、周溝墓の溝がある程度深く残っている点からも明らかであり、意識的に開口部を設けているといえる。さらに、ここが周溝墓の中軸線を意識した場所であることから、溝の掘削にあたって企画が存在したと考えられる。

方形周溝墓8は、円形周溝墓のように突出する張出部を付けるまでには至らないが、こうした規格は入り口部・正面としての意識が存在して、開口部を付設させた可能性が強いと考える。方形周溝墓の正面観や、それに伴う機能的な性格が形態の上で萌芽した段階であろう。直後に築造された円形周溝墓には、周溝を掘り残した状態で、未発達な張出しが存在している。五村遺跡内では、その成立過程を埋めるすべての資料は無いが、方形周溝墓8から円形周溝墓への移行はきわめて示唆的である。すなわち、五村遺跡では、張出しを有する周溝墓の前段階には、方形周溝墓8のようものがあり、その直後に大型の張出しをもつ円形周溝墓が成立したのである。

ただし、五村遺跡の場合は、双方の規模が異なる点、方形と円形の違いからくる系譜等の問題が課題として残るが、当該期の墓の正面観の表現の変遷として位置づけられよう。

一方、円形周溝墓の張出しは、細く直線的に延び、先端部がわずかに幅の狭い溝によって区画されているのが特徴でった。また、周溝はほぼ円形に巡り、張出部付近の周溝が拡大されたり、円形の平面形を著しく変えることなく造られている。この形態は、豊中市服部遺跡や長浜市鴨田遺跡のように円形に巡る周溝を拡張・変造させたものではなく、円形周溝墓の延長的存在であることがわかる。特に張出部先端の溝がなければ、滋賀県近江町西円寺遺跡のように、円形周溝墓の一部を掘り残して陸橋状に付した形態に近くなる。

こうした特徴は、すでに森岡秀人氏が指摘しているように[12]、未発達の張出(突出)部として位置づければ、その変遷が合理的に理解できる。鴨田遺跡のように「ハ」の字形に開いて延びた形態よりは、前段階として捉えることも可能であろう。さらに、後には奈良県纒向石塚遺跡のように発展していく過程が形態上からは推測できる。

張出しをもつ円形周溝墓は、丸山雄二氏によれば滋賀県内では長浜市鴨田と五村遺跡の二例が存在し、前方後方形を呈する周溝墓は一〇

例確認できるという。[13] 張出しをもつ円形周溝墓は、おおむね前方後方形のものよりも前段階の可能性があり、直後に前方後方形の周溝墓が各地に造られている。東海地方に近接する当地方の、複雑な交流関係が存在する点を指摘おきたい。

おわりに

五村遺跡は、過去の調査によって、巴形銅器や梯子等の木製品を出土した遺跡として、この地方を代表する中心的な集落として注目を集めていた。しかし、いずれも小範囲の調査であったために、その実体は不明の部分が多かった。今回の五村遺跡の調査では、弥生時代後期から庄内式並行時期にかけての墓域を中心とする遺構の存在が明らかになった。その概要は本稿の通りであるが、これまで断片的にわかっていた居住域や墓域との関連性が、時代的な変遷の中である程度把握することが可能になった。

出土遺物では、円形周溝墓の供献土器や木製品の他、竪櫛や石杵等の類例の少ないものがあり、祭祀的性格と関係して破棄されたものとして位置づけをすることができた。とくに石杵については、墓制との関わりが強く認められ、円形周溝墓の伝播と同時に、祭式として伝わった遺物として認識できた。

今回検出した遺構は、墓域を画する区画溝とその中に造られた方形周溝墓群と、円形周溝墓等である。区画溝は周溝墓を囲むように整然と掘削され、周溝墓の築造前に設定された。その中には、弥生時代中期末から後期、庄内式の段階まで長期間にわる周溝墓が造られており、計画的に設定されたことが明らかになった。さらに、区画内の小群を画する小区画溝の存在の可能性も指摘した。

こうした区画は、旧い墓が意識され続け、長期間墓域として存続していた。方形周溝墓は、三基前後が一つの群を構成し、規則性をもって造られていた。区画の中は不規則に周溝墓を造営するのではなく、世帯等に割り当てられた空間が存在し、その範囲に規則的に墓が造られていった様子が明らかになった。しかし、溝6の区画溝は、円形周溝墓の造営のためのものであり、他の墓域との隔絶化が認めらる点において、前段階の区画溝と性格を違えている。円形周溝墓を盟主的な人物の墓とすれば、この段階においてさらなる再区画の意味があった。

集落の区画については、既に弥生時代前期より集落を画する環濠が存在する。集落の空間構造のモデルは、基本生活領域が中心部にあり、その外側に外帯空間、機能空間、キャチメントエリア、外界が存在し、その中を道が通じるという。[14] この中で墓域は外帯空間に属し、その内側に居住域(生活施設)があるという。五村遺跡では、時期的な諸問題はあるが、居住域、墓域、区画溝で造られた道が明らかになり、こうしたモデルに符合する。さらに、各空間をより明確にした、ここでは居住域と墓域、墓域とキャチメントエリアを画した区画溝がより良好

検出された例として位置づけられる。

五村遺跡では、張出し付きの円形周溝墓の前段階に、形態的に系譜のたどれる可能性をもつ方形周溝墓が存在していた。方形周溝墓8が直接の系譜ではないが、直前の段階にこうした例を認めることを指摘した。円形周溝墓は、張出部が未発達な段階として位置づけられ、形態的には鴨田遺跡に先行する状況が読みとれるものの、明確な遺物の差によって証明はできない。従って、前方後方形の墳墓を含めて、遺物や遺構による観察から、その系譜や成立、変遷、終焉のあり方を今後検討していきたいと考える。

方形周溝墓から張出付きの円形周溝墓に移る点は異様であるが、弥生時代終末の墳墓には様々な形態が認められる。たとえば、石川県旭遺跡群では、四隅突出型墳墓から、四隅の切れる方形周溝墓、さらには方形周溝墓と前方後方形の周溝墓へと、時代の変遷によって多様な形態の墓を造っている。[15] 特に、前方後方形の周溝墓への変化は、これまでの伝統上にはなく、突然に出現するのである。この点が弥生時代終末の特徴とも考えられ、当地域においても同様に窺えるのである。古墳出現前夜の共通した社会状況の中で理解できると考えられる。

本稿は、五村遺跡の発掘調査・整理参加者全員の成果である。たまたま筆者が執筆の任にあたった。報告書の刊行から本稿の成稿に至るまでには、担当者の信里芳紀(財・香川県埋蔵文化財調査センター)、佐々木勝(守山市教育委員会)、林大智(石川県立埋蔵文化財センター)の各氏に、数々の助言、御指導をいただきました。御礼申し上げます。同様に、清水千秋、清川彩子、小橋健司、斎藤欣延、稲田望子(以上奈良大学学生)の各氏は、報告書刊行に至るまでの長期間、昼夜を問わず熱心に作業に取り組み、青春の一コマを同書に刻まれました。この多大な努力と協力に敬意を表し、合わせて御礼申し上げます。

また、丸山雄二、坂本正裕(長浜市教育委員会)、福井智英(虎姫町教育委員会)、徳野裕明、徳本悟、久田享(奈良大学学生)、大西健吾(多賀町教育委員会)の関係各氏、および滋賀県教育委員会、虎姫町教育委員会・他関係機関にも、多方面から御指導・御協力をいただきました。紙面を借りて謝意を申し上げます。

註

(1) 同調査の速報は、大西健吾「虎姫町五村遺跡発掘調査速報」『滋賀考古』第一四号　一九九五年、に出されている。

(2) 植野浩三・信里芳紀他『五村遺跡―いきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書―』(『虎姫町文化財調査報告書』第2集　虎姫町教育委員会　一九九七年)。

(3) 谷口義介・宮成良佐「注目される巴形銅器　五村遺跡」『北近江の遺跡』サンブライト出版　一九八五年。

(4) (田中勝弘・中川通士『東浅井郡五村遺跡』(『ほ場整備関係発掘調査報

告書』Ⅶ－3　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　一九八〇年)。
(5)　用田政晴「虎姫町五村遺跡出土のL字形筒状土製品」『滋賀県文化財だより』No.98　一九八五年。
(6)　細川修平『虎姫町五村遺跡発掘調査報告書』(『虎姫町文化財調査報告』第1集　虎姫町教員委員会　一九九一年)。
(7)　北村圭弘・中村健二「虎御前山南麓平野の遺跡」『(財)滋賀県文化財保護協会紀要』第4号　一九九〇年。
(8)　鈴木元他『大垣市埋蔵文化財調査概要』平成六年度(『大垣市文化財調査報告書』第二七集　大垣市教育委員会　一九九六年)。
(9)　信里芳紀「五村遺跡出土の竪櫛について」前掲註(2)文献。
(10)　佐々木勝「五村遺跡出土の石杵について」前掲註(2)文献。
(11)　福田聖「方形周溝墓と溝－方形周溝墓群に伴う溝について－」『研究紀要』第一二集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　一九九五年。
(12)　森岡秀人「定型化以前の前方後円形墓」『季刊考古学』第五二号　一九九五年。
(13)　丸山雄二「北部近江における張出しを有する円形周溝墓」前掲註(2)文献。
(14)　酒井龍一「拠点集落と弥生社会」『日本村落史講座』一　景観Ⅰ　原始・古代・中世　雄山閣　一九九〇年。
(15)　前田清彦他『旭遺跡群』Ⅲ　松任市旭工業団地中央地区造成に係る宮